

農業社会の存立構造

— 真木悠介稿「現代社会の

存立構造」を手掛りにして —

川口 諦

真木悠介氏はいま、「現代社会の存立構造」と題する論文を雑誌『思想』に連載中であり、これまでに、その序および第一部が四つの論文に分載された。⁽¹⁾

題名がしめすとおりこの論文は、現代社会の構造をその存立の機制⁽²⁾そのものから説きおこして、再構成しようと企てている一方、私がいま問題にしようとしているのは日本の農村社会であり、なかならずその基底をなしていると考えられるところの「共同体的形態の存立構造」であって、真木氏の論文とはその主題が異なっている。しかし真木氏の描き出す現代社会は、それに固有の存立機制に発するその論理構成において、共同体的

形態の存立構造を写し出すに恰好の鏡の役割を果たしてくれるように思われる。

真木氏の論文はまだ完結していないけれども、さしあたり右の四論文のかぎり、これを鏡にしながら私の読みとった共同体の姿を、以下にノートしておきたい。

注(1) 真木悠介「現代社会の存立構造」

(『思想』一九七三年五月号、岩波書店)。

「外化をとおしての内化」

(『思想』一九七四年五月号、〃)。

「階級の論理と物象化の論理」

(『思想』一九七四年七月号、〃)。

「資本制社会の存立構造」

(『思想』一九七四年八月号、〃)。

(2) 「社会の存立機制」という用語に、私は「真木論文」ではじめて接した。詳しくは「論文」によられたいが、例えば、市民社会の歴史的諸形態をつらぬいてみとめられる存立機制を、真木氏は、「人格と人格とが相互に対立し相剋し合っている関係」とみているようである。

一、社会の存立構造

1 存立の機制

その第一論文「現代社会の存立構造」は、このたびの真木氏の論作の総序をなすものだが、その冒頭に、つぎのような注目すべき視角が提起されている。

「人間が、その人間としての生成以来、本源的に社会的な存在であつたということは、あらためて復論するまでもないと思われる。しかし、人間が社会的な存在であるというそのあり方を、一歩たちいって具体的に掌握しようとする、じつは『社会』の『社会』としての存立の機制そのものが、歴史的に根柢的な変化をこうむってきたことがわかる。さまざまな社会形態の歴史的な出現とその没落という当然のことを、ここで言おうとするのではない。それらさまざまな社会形態の形態的な変化のさらに根柢に、『社会』としての存立の構造そのもの、すなわち諸個人のあつまりが、『社会』という固有の存在水準を形成するその機制自体が、すでに身における歴史性の問題である。すなわちこの存立機制は、つぎのような形態をとることがありうる。

- I 諸個人が直接的・即目的に社会的な存在である場合。(即目的な共同態。——社会の『共同体』的な形態における存在)
- II 諸個人が媒介的・即目的に社会的存在である場合。(集合態。——社会の『市民社会』的な形態における存立)
- III 諸個人が対目的に社会的な存在である場合。(対目的な

共同態。——社会の『コミュニオン』的な形態における存立)。

真木氏は、マルクスにおける物象化論の意義を、「近代」社会諸科学の主流を構成してきた分析理性的な諸科学を超越するものとして、つぎのようにとらえている。

「既成体としての事実内に在し、物象化された事実を立脚点とする分析理性的の方法にたいして、マルクスは、これらの『物質的な』諸現象・諸法則をその生成の論理において解明し把握する弁証法的理性の方法を、端的に対置している。Sache(事物)から出発し『Sacheに仕える』分析理性の社会諸科学とは逆に、弁証法的な理性は、Ver-Sach-liehung(事物・のうちに・なること)『物象化』の過程をまず問題として主題化すること、すなわちSacheたる社会諸現象・諸法則の存立の根柢そのものをまず問うことをみずからに課している。このような溶解においてはじめて、ばらばらな実体として凝固している諸々の社会的形象が、総体的な連関の各契機として統合的に把握されうるのであり、したがってまたその固定性・非歴史性の実相をあらわすのである」。

「歴史の主体＝実体は『個人』でも『社会』でもなく、『つながりあう諸個人』の『相互につくり合う』関係そのものである。『類の本質』をこのように、諸個人の実践的な諸関係の総体的性

としてとらえかえしてはじめて、その関係の特定の現実的なあり方が疎外Ⅱ物象化をもたらすという把握への道がひらかれ、したがって実践的には、その止揚への具体的な展望がきりひらかれうると同時に、他方また社会科学の方法として具体化される。

右の引用文に傍点を付してある「その関係の特定の現実的なあり方」こそ、真木氏がこの一連の論稿で摘出しようとしているところの、「根柢的に歴史性を身におびている『社会』の『社会』としての存立の機制」そのことにほかならない。現代社会の疎外Ⅱ物象化は、それに固有の存立機制に由来するその形態化だ、と真木氏はみているのであろう。

2 労働の回路と交通の回路

つづいて第二論文「外化をとおしての内化」に移ろう。さしあたり必要なかぎり、論文の一部の要約的引用を続ける。

「本源的に△自然内存在Ⅴとしての人間は、その残余の自然との物質代謝において、△労働をとおしての享受Ⅴという、時間性の次元において媒介された構造を獲得することによって、外圍の自然を距離化し対象化する主体として、物質性の宇宙のただなかに屹立し、内・自然存在から対・自然存在へ、自己を形成する。この△労働をとおしての享受Ⅴという時間性の次元

における媒介の回路を、ここでは△労働の回路Ⅴとよぼう。△労働の回路Ⅴの確立は、対・自然存在としての人間存在の生誕を告げる」。

真木氏によれば、この△労働の回路Ⅴの確立、対・自然存在としての人間存在の生誕が、存立構造の第Ⅰ形態たる「共同体」的存立の前提である。

「本源的に△社会内存在Ⅴとしての諸個人は、その残余の社会との物質代謝において、△譲渡をとおしての領有Ⅴという、社会性の次元において媒介された構造を獲得することによって、外圍の社会を距離化し対象化する主体として、共同存在のただなかに自立し、内・社会存在から対・社会存在へ、自己を形成する。この△譲渡をとおしての領有Ⅴという、社会性の次元における媒介の回路をここでは、△交通の回路Ⅴとよぼう。交通の回路の確立は、この人間存在の歴史の内部で、対・社会存在としての△個人Ⅴの存在の生誕を、したがってまた、このような△個人Ⅴ相互の、媒介された社会性そのものとしての、市民社会の生誕を告げる」。

真木氏によれば、この△交通の回路Ⅴの確立が、存立構造の第Ⅱ形態たる「市民社会」的存立の前提である。

さて、この第Ⅱ形態たる市民社会では、「△労働をとおしての享受Ⅴという第一次的な回路は、△譲渡をとおしての領有Ⅴと

いう他者性の回路を包摂することによって二重化され、生産過程・流通過程・消費過程という風に、相互に切断された諸カテゴリーに分裂する。やがて、それぞれの過程はそれぞれの『部門』として社会的に自立化し、形態化する。いまや、労働し欲求する諸個人が固有の意味での他者と出会うのは、流通過程においてのみである。すなわちこの流通過程こそが、諸個人の集列的な関連そのものとしての『市民社会』の、直接の定在であり、公的な領域である。直接に労働し享受する主体としての諸個人は、私的な生産者および消費者として市民社会の表層から疎外され、私的な生産過程および消費過程を担うにすぎない。

市民社会の経済関係の唯一の表層としての流通過程（＝交通の回路）においては、諸個人はその、直接に人間的な欲求からも労働からも抽象化された経済人^{ホモ・エコノミクス}として、抽象的な商品（貨幣）所持者として立現われる。この『公的』な面からみれば、この部面自体の存立を現実において支える人間たちの生産過程および消費過程（＝労働の回路）は、内部をうかがい知ることのできない暗箱^{ブラックボックス}として存在しているにすぎない。

3 市民社会の存立機制

つづいて第三論文「階級の論理と物象化の論理」に移ろう。

「労働過程および交通過程における、このそれぞれの内外化

をとおしての内化√（労働をとおしての享受、譲渡をとおしての領有）の回路が、内化^{イナ}として回収^{リコール}され、外化^{アウト}として、その還流する回路を遮断されるとき、これを疎外^{エクスルージョン}と規定しよう。この内外化なき外化√にたいしては、内外化なき内化√が双対している。このような内外化なき内化√（労働なき享受、譲渡なき領有）を、ここでは収奪とよぼう。

社会内過程としての疎外の第一の、最も単純な原初的な形態は、人格的に相対する諸個人相互の、一方が内外化なき外化√の主体、他方が内外化なき内化√の主体、であるような内外化√の収奪√の関係である。この関係は歴史的には、近代市民社会に先行する諸共同体内部における人格的支配（領主対奴隸・農奴など）関係においてみられる。

第二に、この収奪関係がほぼ対等の多数の諸個人相互のあいだで相互的に成立するばあい、このような私的な主体相互のあいだの集列的な相剋の関係性は、この彼ら自身の関係の総体性を、対象的な運動の法則性として存立させる。個々の内外化√の収奪√関係をその微分的な契機として内包するこの疎外の水準を内外化√物神化√関係の水準とよぼう。その歴史的な前提は、労働諸条件の共同体的所有の解体＝労働諸条件の私的な所有と、これにもとづく私的な労働、およびその成果の交換を媒介とする媒介された依存関係であり、その経済的な形態化は商品・貨幣

幣関係である。

第三に、この物象化的な関係そのものを基礎に、労働する主体の労働力能そのものが、「市民社会的な平等Ⅱ等価交換の形式」を媒介として、他者の所有に内化されるとき、**集列関係**そのものを基礎に、媒介され高次化された階級関係がふたたび存立する。いうまでもなくその歴史的Ⅱ現実的な定在形態は、資本—賃労働関係である。△疎外↓収奪Ⅴ関係と△疎外↓物神化Ⅴ関係との重畳する、この物象化された収奪の関係を、ここでは△疎外↓蓄積Ⅴ関係の水準とよぼう。

真木氏に即してここであらためて特に注目しておきたいのは、第二水準の疎外、つまり、社会の市民社会的な存立の機制そのものであるような形態の疎外である。

「第一水準の、単純で直接的な疎外は、その対極に可視的な収奪者をもっていた。しかしこの第二水準の疎外においては、少なくとも可視的な実体としては、どのような収奪者をもみずからの対極にもたず、あえていえば、この媒介たる物象の物神性そのものにむかって、万人がともに疎外されている。この奇妙な、一見収奪者なき疎外はいったい、どのような存立の機制をもつか。

結論を一言に言ってしまうと、それはこのような物存在を媒介として、人格と他の人格とが、相互に対立し相剋し合っ

ているからであり、したがって、いずれの個人にたいしても、これらの物存在は、彼の意思とは独立して対峙する不可視の龐大な他者たちの意思を、総括し凝縮してさしむけてくるからである。

市民社会に生きる諸個人が経済形態の位相において相互にとりむく関係の原基形態は、商品交換の関係である。この商品交換において諸個人は相互に、自己を△主Ⅴとなし他者を△奴Ⅴとなす意思として、すなわち自己の欲求を、他者の労働によって充足しようとする意思として対峙する。そしてこの対峙のなかで、行為事実的に、相互に自己を△奴Ⅴとして規定する。すなわち他者の欲求に奉仕するような仕方、労働すること、を強いられるものとして、みずからを規定する。彼らは相互に、収奪し、かつ疎外する。この欲求主体と労働主体との関係は、まさにヘーゲルにおける△主と△奴Ⅴの関係に他ならない。この関係を事後的にみると、たとえば共同態内の分業関係における交換と異なることなき、たんに自明の、没問題的な『交換』一般がみえるだけである。この関係を、はじめから事物化された関係態として外観するのではなく、いったんはそれぞれ、側から、関係行為する当事者主体に内在することを媒介するときにはじめて、それはひとつの矛盾として、対立するものの統合として把握される。

そして商品関係を——すなわち、市民社会的な経済関係の原

基形態としての、この単純な、個別的な商品交換関係を、凝固した事実性として事後的にみるのではなく、相互的かつ潜在的な $\wedge$ 収奪 $\downarrow$ 疎外 $\vee$ の関係として、その存立の機制において、まず把握することこそが、市民社会の経済形態の一切の高次展開の存立を概念的に把握するための、決定的な鍵をなす。

要するに、第二水準の $\wedge$ 疎外 $\downarrow$ 収奪 $\vee$ 関係は、第一水準の単純な直接的な $\wedge$ 疎外 $\downarrow$ 収奪 $\vee$ 関係の、普遍的な止揚として存立する。市民革命は、前近代的な支配関係の、普遍的な止揚に他ならない。

二、農業社会の存立構造

真木氏によって描かれた現代市民社会の構造、なかなかその根底をつらぬく存立の機制を右のごとくであるとするとき、これを鏡として写し出される「共同体」的形態の存在は、どのような姿をもって描かれるであろうか。真木氏にならうてそれを、「はじめから事物化された関係として外観するのではなく、いったんはそれぞれの側から関係行為する当事者主体に内在することを媒介するとき」、「共同体」的形態の存立の機制はどのようなものとして把握されうであろうか。

真木氏によれば、「共同体」的形態においては $\wedge$ 労働の回路 $\vee$ の確立（対・自然存在としての人間存在の生誕）が、その

存立の前提であった。ところで、真木氏が $\wedge$ 労働の回路 $\vee$ でもっぱら注目しているのは、「生産手段の生産という明確に形態化された $\wedge$ 手段性の回路 $\vee$ 」である。しかし私はあえて、これに $\wedge$ 農業労働の回路 $\vee$ を対置してその特徴を考えてみることにしたい。もちろん、 $\wedge$ 農業労働の回路 $\vee$ も生産手段の生産なしにはありえないのだから、それにとまって真木氏が $\wedge$ 手段性の回路 $\vee$ に即して指摘するような諸事象があらわれる筈である。しかし他方、そこには農業労働に特有の、真木氏の触れていない重要な側面もあるように思われる。

1 生態系と農業

この $\wedge$ 農業労働の回路 $\vee$ に関連して、玉野井芳郎氏が最近の諸論稿でしめしている問題提起は、まことに興味ぶかいものがある。玉野井氏はいう。

「いうまでもなく生態学は、環境と関係のある生活系に関する生物学の一分野であるが、ここで見落してはならないのは、生物個体ではなくて生物個体群とその複雑な関係が主題となっていることである。その関係を表現するエコシステムをエネルギーの変換と物質の流れに沿って追跡してゆくと、人間がその生活を、なによりもまず生態系におけるなんらかの『生産力』に依存していることがわかる。この『生産力』に大きく寄与す

るものは光合成をおこなう緑色植物である。このこと一つをとっても明らかのように、人間がその生活系において最も密接な関係をとるむすんでいるのは、われわれの常識に反して動物ではなく、植物であり、さらに微生物である。ここでは人間は、これらの生物個体群とその環境の内部に、『消費者』として位置づけられることになる。人間は、道具をつくる動物であるより前に、このような生態系の存在を認識し、その系に介入することによって系の自律性の安定を確保することができなければならない⁽³⁾。

「いかに単純組織の生物といえども、たとえば空腹になるとひとりで食糧さがしに出かけるように、環境にたいしても自立的に働きかけを行っている。しかし、食糧さがしは、食糧の育成と栽培にくらべると、単純な自己維持または自己生産のレベル以上に出るものではない。後者は、前者を土台にして、はじめて自己組織系という高次のレベルを表わすものとなっているとみてよいのである。

人間はヒトとしてシステムの内部に対象化されると同時に、その外部にもシステムを見る眼を設定することができる。それだからまた人間は、人類史の決定的な文明段階として、食糧の育成と栽培の組織、すなわち定着農業の時代を開始することができたのである。生態系を認識することは、けっしてたんに自

然に從属することではない。その認識はとりもなおさず、その実践にほかならず、また実践によつてはじめて生態系そのものも定常系として確保されるものになると考えなければならぬ⁽⁴⁾」。

「人間社会の生活に不可欠な共同体の存在は、このような自然・生態系の存在を根底においているものなのです。過去数世紀にわたつてくり広げられてきた、資本主義と社会主義の長く複雑な歴史とその教訓を考えてみるとわかることですが、共同体というものは、商品経済または市場経済の発展によつて、けつして解体しつくされるものではないのです。共同体の問題は、経済体制の根底に横たわる永遠の問題として、もう一度再確認する必要があるのです。いまや理論的にも、工業が農業から分離する起点、いいかえると『農工分岐点』を頭に描いてみなければならぬということがわかります⁽⁵⁾」。

以上のような玉野井氏の所説は、さきの真木氏における「人間・対・自然」の範式を存立せしめる「労働の回路」の確立」と、同じことを述べているといつてもよい。しかし、真木氏がそれを農業と工業の区別なく労働一般としてとらえているのに対して、玉野井氏は、定着農業の時代においてこそ「労働の回路」は確立され、人類史の決定的な文明段階が画された

のだという。つまり、たんに労働一般ではなく、農業労働に、人間存在の自己認識における特別の根底的意義をみつめているのである。

さきにも引用したように真木氏は、市民社会の経済関係は、 Λ 交通の回路 V を直接の公的な存在としており、 Λ 労働の回路 V は私的な過程として表層から疎外される、と指摘した。一方、玉野井氏は、この同じ関連を、その内実における農業からの工業の分離、市場と工業の世界という非生命系のワク組みの形成、その内部での人間という生命体の外的自然との物質代謝の抽象、とみなしている。

市民社会が Λ 交通の回路 V をその表層として急速に資本制的な発展をとげたその内側には、商品市場を媒介にして、それまで農業と密接に結びついていた工業を強引に引き離し、農業とは別の生命のない世界で工業の生産力を飛躍的に増大させてきたプロセスが裏打ちされている。このようにして一切が擬似工業化された市民社会の経済関係の表層では、人間は抽象的な経済人として生態系から自立してしまふ。生命ある具体的人間は、暗箱のなかにおさめられた私的な Λ 労働の回路 V においてのみ、なかんずく労働力再生産の過程において、わずかに生態系の生命循環と関わりをもつにすぎない。

資本制工業を軸として肥大化した非生命系の世界の独り歩き

が、生態系固有の自律的システムとの間に不整合をきたしているところに、玉野井氏は現代の危機的状況をみているのである。

2 農業労働の回路

単なる食糧さがしとしての採取・狩猟・漁撈そして略奪は、いずれも、そこにあるものを奪い取り、殺し、加工する過程にすぎない（これは今日の工業生産における資源物質の採掘、ついでそれら生命なき物質の加工・消費をとおしての老廃物質の廃棄、という非生物の、一方交通の論理に通ずる）。その日常労働の主軸はいわば戦闘（生態系のなかでの『消費者』同士の争奪・殺戮）であり、生態系への無意識的な介入・攪乱にとどまる。

これに対して食糧を育成し栽培する農業は、そこにあるものを生かし養い育てる過程である。その労働は生態系の『生産力』の実践的認識とそれへの肯定的関与であり、それを通して生態系を定常系として確保する日常不斷的の営みである。

採取・狩猟・漁撈ないし略奪の生活のように（ないしはその手段としての武器等の生産のように）、 Λ 労働の回路 V が生命循環の時間性の次元において十分に把握されていないあいだは、そのかぎり、人間の生もいまだ半睡の状態にとどまっていたといえるかもしれない。 Λ 労働の回路 V の対目的な把握は、農

業生活の段階において一つの画期に達したとすべきであろう。農耕においてはじめて人間は、生命循環の時間性の次元に媒介された労働の回路をとおして覚醒し、自然・生態系の『生産力』を対自化したといえよう。そして同時に、この労働の回路をとおして人間は、つぎにみるように時間性の次元における分業関係（＝共同体）をも対自化するに至ったと、私は想定したのである。

労働の回路は、生命循環の時間性の次元において媒介された構造をもたざるをえない。農業は、自然に直接に深く接し、自然と共にある生活であるとともに、農作物を「栽培する時間」において、なかんずく生育を「待つ時間」において、自然を距離化し、対象化しなくてはならない。「一年は十二月なり、しかして月々に米は実るにあらず、ただ秋一ヶ月のみ米実りて十二ヶ月米を食うは、人々そう決定し、注意するによる」（福住正元『二宮翁夜話』第二五話）。労働を通じて米の生育を注意深く対象化することにおいて、農民は自然・生態系に対する肯定的関与（＝自己規制的決定・作為）の主体なのである。

農業におけるこの「栽培する時間」は、農作業の手順と、生育を「待つ時間」との、季節的な配列によって構成されている。農業の全体は、季節的に洩れなく配列されて、同一の主体によ

って順次におこなわれるところの、それぞれ異質的な作業と待機との継起において完結する。農業において一定の時点（季節）に空間的側面にあらわれる多数は、たんに同質の作業の量的多数を意味するのみで、なんら多数なるがゆえに全体の循環と完結とを招来するものではない。農業の再生産にとって不可欠なのは、時間的側面における異質の作業の継起的秩序である。

つまり、時間的な側面に配列された分業関係が農業の基本である。かくて農業における労働主体は、作物の生命循環の時間性に媒介された作業過程の継起において、過去労働の成果の現在における領有（＝被譲渡）と、現在労働の成果の将来にむけての譲渡（＝被領有）という社会性の次元を獲得する。この時間性に媒介された労働主体間の距離化によってもたらされた社会性概念を、いわゆる分業の空間性から逆に振り返ってみて、やや矛盾したいい方だが、時間的分業と名付けてみたい。

このような分業形式は、資本制社会の工場制工業にその雛形をみるような分業形式とは全く異なっている。工場制工業における分業形式では、異質な作業部門は空間的な広がりの中に配列され秩序づけられているのであり、時間はたんなる経過とそれともなう量的な増減として、空間的全体の単純な積み重ねとしてあらわれるにすぎない。そこでの分業は、同一時点の空間のなかで有機的な一つの完結を表現している

のであって、労働主体にとつての労働の時間的経過は、質的におなじ動作の涯限なき機械的、連続的な反復にすぎない（『モダン・タイムズ』におけるチャップリンの作業を想起されたい）。前述のように、八労働の回路Ⅴが暗箱にかくされている市民社会では、分業関係は流通過程の社会空間においてのみ、対自化されているのであった。

農業生産にとつて不可欠なこの時間的分業の認識にもとづいて、農民は、昨年（先代）の労働の乏しい成果を一二カ月（生涯）にわたって食いつなぎ、来年（後代）を慮って空腹に耐えつつ現在の労働に當々と精を出す。このような、一定の未来の表象にむけての現在の自律的な自己規制、その実践としての一定の目的意識的な作為の不断の反復、これが平凡ともみえる農民の日常生活の主体的な中味であろう。このように時間的分業を対目的にとらえることにおいて、農民は、農業社会の再生産にむけての肯定的関与（自己規制的决定・作為）の主体なのである。

以上のような農業労働の過程は、たんに農民個々人の単独行動としてあるばかりではない。むしろそれは、むらびとごぞつての一種の集団的な行動であった。田植えの季節にはむらびとすべてが田植えに出ている。夏の盛りにはむらの若衆たちが馬

の行列をつくつて山に草刈りに出かける。屋敷畑ではどの家でも女や老人たちが野菜の手入れに余念がない。秋になると、むら中が稲刈りのよろこびに湧き立ってくる。農閑期でも同様である。一月、一二月にはどの家の庭でも脱穀作業が賑わい、一月、二月に雪がつもれば、どの家からも土引き、肥引きの馬が曳き出される。

このような各農家の諸作業の季節的な同時性と、加えてその単調さと過酷さとは、これに耐え、これを緩和しつつ持続させるためのさまざまな集団的工夫を生み出す。農村における民俗的諸行事の季節的に配置された豊かさやその規則性は、そのような集団の知恵の所産に外ならない。むらは、その社会諸慣行を通じて、農民個々の農業生活がもっている自己規制的な行為様式を側面から補強し、それぞれの再生産を支える暗黙の力を發揮しているのである。

この農業社会では、生命循環の時間性の次元において媒介された八労働の回路Ⅴが、まさに公的な直接の社会的定在なのである。

付言しておくが、ここで主題にしている農業社会を、たんに農業を主たる職業とする人々の集団というのみでは十分でない。ここである農業社会は歴史的な社会であつて、その成員は、共同体とその占取している土地に、選択にさきだつて生

みこまれるのであり、この意味で、かれらの生活の土地にたいする定着性と、共同体への所属とは本来的なものなのである。

また、ここで描かれている農業社会の姿は日本の近世以降のものというべきかもしれない。しかしここでは、さまざまな社会諸形態の歴史的な興亡のさらに根底につらぬいている、農業共同体の存立の機制そのものを問題にしたいのである。

3 農業社会の存立機制

農業社会の再生産の特質たる時間的循環構造と、時間的系列に沿った秩序形式への関心の傾斜について、いますこし考えますんでみることにしたい。ここでは、その再生産の過程で直接に影響を与え、かつ、影響を蒙る他者（労働主体と享受主体、あるいは譲渡主体と領有主体）は、時間によってへだてられて相対している。再生産の完結にむかっている社会的相互作用は、時間の側面にあらわれる。部分がそれを介して自己を完結させる全体、個人がそのなかにおいて自己を実現する社会は、一義的には時間の側面にあらわれる。つまり農業社会は、空間的にはそれ自身単独で多かれ少なかれ自足的な全体を代表してあらわれ、時間的には異質的な多数が継起的に組み合わせられたその部分としてあらわれる。部分を総括して全体たらしめるもの

は、もっぱら時間である。

全体の存在と全体の存続とはおなじことのようにみえる。しかし社会過程にして、その時間的秩序にしたがっておこるものと、空間的秩序にしたがっておこるものとは、ひとしいものではない。全体は部分の相互作用を通じてその統一をつくりだし維持するけれども、時間的にへだてられている部分は、たんなる相互作用によつては全体の統一を存続させることはできない。時間的に相互に離れている部分の間には相互作用は不可能である。ここでの全体の構成には、部分の作用の相互性が時間を超えた観念的手段によつて媒介されなければならない。時間的側面における分業の循環構造は、超時間的な全体の統一性が予め意識されてはじめて存続可能となる。そしてその意識は、過去から将来につながる時間のなかで構成される全体の存続にとつての不可欠の部分として、現在および現時点に生きる個体の存在性を意味づけるものとなるであらう。

農村調査などの際に、なにげなく語る農民の言葉のはしには、むらに住む人々に特有の、時間・空間の広がりへの配慮を行き届かせた社会観が滲みでているものである。そのいくつかの例をあげてみよう。

「どの家が困るのも同じだ。『将来その人のためになることならば無理に強行してもいいかも知れんが、そうでないのなら

反対だ」「われわれが中年になったとき、どういう事態が起らないとも限らぬ」「お互いに良いときもあれば悪いときもある」。「後世にどんな迷惑をかけないともかぎらない」「今も昔もかわらずにグルグル廻ってゆくのではないだろうか」。

こういった言葉の断片から察せられる農民的な論理を私なりに整理してみると、およそつぎのようになるのではないかと思われる。

1 農民は現在のむら社会の状況を、榮枯盛衰のたえず繰り返されている超現在のな時間の流れのなかの一つの断面としてとらえていること。

2 その前提としてむらの人たちお互いがそれぞれに、そのような榮枯盛衰の反復の流れのなかに、これまでも代々暮らしかつてきたし、これからさきも代々暮らしかつてゆく仲間だとして期待し合っていること。

3 したがって自分自身を含めてむらの人たちお互いは、将来栄えるかも知れないし、あるいは没落するかも知れない、そういうお互いとして、単に現在の状況だけで評価し合うのではなく、お互いにその個々の存続を尊重し合っていること。

真木氏もいうように、「労働とは本源的には、生活を生産する生活（マルクス）として、その意味を自乗化され豊饒化され

た生活の過程に他ならない」。農民は、自己規制に裏づけられたその労働過程の時間性の次元において、単に未来の労働生産物の享受の表象を受け取るにとどまらず、いままたように過去と将来とを媒介するものとしての現在労働の社会生活の意味をも同時に受け取るのである。そこでは、商品交換の関係とはちやうど反対に、お互いに「他者（将来）の欲求を、自己（現在）の労働によって充足しようとする意思として」、暮らしかつてゐるのだ。農民たちはその農耕生活の過程を、このような時間的な交通の回路（被譲渡をとおしての被領有）において対自化しているといえよう。

かくて、△譲渡をとおしての領有△という、社会性の次元における媒介の回路（△△交通の回路△△）には、二つの種類が挙げられることになる。一つは、△労働の回路△から切り離され疎外された集合態的な流通過程としての市民社会のそれであり、二つは、△労働の回路△と不可分に成立する共同態的な時間的分業としてのそれである。前者は、諸個人が相剋的關係においてある△交通の回路△であり、後者は、諸個人が相乗的關係においてある△交通の回路△である、といえよう。

このような農耕的な△労働の回路△（△相乗的な交通の回路）からは、自と他とを絶対的に分離・区別する市民社会的な諸個人とその私的所有の觀念はでてこないのではないか。一方、

しばしばその對極に想定される個の絶對的埋没としての共同体的所有もまた、ありえないであろう。個の埋没から個の覚醒・解放へといういわゆる近代化の図式は、このような生成・循環の論理で組み立てられている社会を内在的に説明するには、そぐわないのではないであらうか。

*

真木氏はしかし、システムの自己維持的な再生産のメカニズムそのものが逆に、このシステムの解体と自己変質のメカニズムに転回することを、共同体もまたまぬかれえないとみる。例えば、つぎのように説いている。

「諸個人が凶作や祭祀や戦争などに備えて、その労働の剰余部分を、共同体自体の所有としていつたんは外化すること、それは凶作や祭祀や戦争のさいに還流するはずのものであるかぎり、ひとつの媒介された内化の回路を形成するにすぎない。しかしこれらの共同体的な対象化と譲渡の回路（欲求の直接的な発露にたいする自己抑圧の構造）は、それがまさしく共同的な外化をとおしての内化の回路であるがゆえに、この共同性自体を具現する諸個人による私的な横奪にむかってまた、無防備にひらかれている。それはまさしく共同的な内化の回路であるがゆえにこそ、みずからの反対物への、疎外への転回にむかつて無防備にひらかれている」。

一方、ザスーリチへの手紙におけるマルクスによれば、共同体はその強靱な生命力によって特徴づけられている。「さまざまな原始的共同社会の生命力は、セム人、ギリシヤ人、ローマ人などの社会のそれよりも、まして近代資本主義社会のそれよりも、比較にならないほど大きかった」。この手紙を書いたマルクスにとって、共同体の原古的な形態の維持と発展とが、それ自体、社会革命の目的（手段ではない！）につながっていたのである。玉野井氏もまた、つぎのように強調する。「共同体というものは、商品経済または市場経済の発展によっても、決して解体しつくされるものではない」。

真木氏のいう「共同体の転回にむかつての無防備性」と、マルクスや玉野井氏のいう「共同体の生命力の強靱性」とは、どのように結びつけて理解したらよいのであろうか。玉野井氏は、「農工分岐点」が、ためて重要な研究課題になっていると指摘している。それと表裏して、「共同体」の存在しないしその転回の歴史的位置づけもまた、あらためて史実にそくして解明しなおされるべき課題なのではなからうか。

真木氏が提起した「社会の存立機制」の可能的な三形態において、第Ⅰ形態たる「共同体的形態」の存立構造を（なかならず「農耕共同体」を、単なる個の埋没としてでなく固有の自律的な動きを内在するものとしてとらえかえすとき、第Ⅱ、第

Ⅲ形態とその相互連関の理解もまた、一層、立体的に深められることになるのではないであろうか。

注(3) 玉野井芳郎『転換する経済学』(東京大学出版会、一九七五年)、二二七ページ。

(4) 玉野井芳郎『エコノミーとエコロジー』(『思想』一九七六年二月号、岩波書店)。

(5) 玉野井芳郎『比較経済体制論』(セミナー経済学教室、一〇〇、日本評論社、一九七五年)、五〇～五七ページ。

(6) 真木氏は、この共同体の自己転回の今日的、な問題性を、つぎのように付言している。

「共同体の自己『転回』の論理は、たんなる歴史的過去の『段階』についての死せる知識としてでなく、現代社会そのものの存立の構造のうちに、またその止揚の集団的実践の構造のうちに、現存し再現する共同性の自己転回の問題性として、アクチュアルな主題性をもつ。たとえば、①フアシズム論、天皇制論の、あるいは②家族論、職場論、地域論等の、あるいは③社会主義建設論、スターリニズム論の、あるいは④コミュニティ論、運動組織論の、実践的Ⅱ理論的諸問題の把握は、かの本源的共同体が疎外に自己転回する過程の『固有の弁証法』を、論理として、抽出し再構成することを媒介として、はじめてひらかれてくるような問題

性の次元を、それぞれに固有のしかたで含むはずである」(真木悠介「階級の論理と物象化の論理」、『思想』一九七四年七月号)。

一方、真木氏は、共同体の自己転回を不可避のものとみるこのベシミズムを、「人間にとって他者が他者としてあるかぎり、かならずたがいに根源的な相剋の關係にたつという牢固たる信念」のゆえだとして批判し、これに相乗的な人間關係を対置して、永続する現実的なハコミュニケーションの可能性を展望している(真木悠介「コミュニケーションと最適社会」、『展望』一九七一年二月号、筑摩書房)。

(7) 平田清明訳「ヴェ・イ・ザスーリチへの手紙」(『マルクス・エンゲルス全集』第一九卷、大月書店)、三八八ページ。